「日々の理科」（第 307 号） 2015（H27),-5,-5

「自転車でゆく上高地（３） 眼前のアルプス」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

排気ガスと騒音のひどい「恐怖の釜トン」を抜けると、一気に高原の風景になり、心底ほっとする。最初に眼に飛び込んで来るのは、焼岳（やけだけ）の異形である。焼岳は北アルプスでは珍しい活火山で、美しい上高地にあって、その姿は異彩を放っている。

バスやタクシーのお客さんも、トンネルを出れば歓声をあげるだろうが、この県道はトンネルを出ても幅員狭小で、法面も脆弱なので、自動車の駐停車はできない。しかし、苦労して上ってきた自転車の特権。路肩に停めて、絵を１枚描くこともできる。

「上高地への道と焼岳」

道にはところどころ残雪も見られた。以前来た時にはなかったので、近寄って観察してみた。これは普通の残雪ではない。ルンゼ（小さな谷）に固く積もった雪が、春になって押し出されたものである。小規模ながらも堆石も見られ、氷河の末端によく似ている。

トンネルに比べれば、ずっとゆるやかな上り坂を行き、「太兵衛平」というバス停で小休止。この右カーブを曲がると、予告もなく、風景が劇的に変化する。

北アルプスの穂高連峰と岳沢（だけさわ）が眼に飛び込んで来るのだ。太兵衛平のバス停から、大正池や河童橋までは十分に歩ける距離なので、バスで来た方も、ここで下車して、残りは歩くことをお勧めする。

さて、私が小説家だったらこう書いていただろう。

「長いカーブを曲がると、そこにアルプスがあった。」